

文化・芸術

「黒いレストラン」(『Parisの破片』57)

1932～35年、水彩、インク、紙
22・0cm×14・8cm
(当館蔵)

茂田井武 (1908～56年)

茂田井武が欧州滞在中に描いた画帖(がじょう)の多くは、人の手に渡り、あるいは戦災によって焼失してしまいました。

現在、その存在が確認されているのは、「ton paris」(当館蔵)、「Parisの破片(かけら)」,そしてParisからジュネーブに出張中に見た夢などをもとにつづられた「続・白い十字架」(いずれもちひろ美術館蔵)の3冊のみです。

ここに紹介する「黒いレストラン」と名付けられた1枚は、「Parisの破片」につづられていた1冊です。「paris est un million」(パリはひとつ。パリは百万)という言葉で始まるこの画帖は、現存する3冊の中でも最も日記的性格の強いものといえるでしょう。街の断片、記憶のかけら、光と影―茂田井の観察眼は、パリの街を静かにすくいとっています。本展では「ton paris」をあわせ、その若き日のまなざしをのぞいてください。

(小此木)

大川美術館企画展
「没後70年記念 茂田井武「ton paris」とパリの画家たち」から

名画の扉

